

の同じページに「鳥銃手」として見える。ただし、廣範な地域における火器に關する情報を、膨大な文献を駆使して検討した本書にこのような些細な過誤やなお望ましい點が見られるのはむしろ當然で、これらは本書の高い價值をいささかも損なうものではない。

九 評價 眞に世界史の名に値する著書として高く評價したい。また、本書が、各地域を専攻する専門家にも、戦争や火器の問題を考える上で大いに參考になるであろうことは疑う餘地がない。有益な、興味深い書であるだけに、邦譯されて日本の多くの讀者に讀まれることが望ましい。文章は明快である。ただし、言葉に對する鋭敏な感覺を持つ著者が本書の中で時に使用した周到な言い回しを的確に邦譯するには、かなりの英語力が必要かとも思われる。

なお、著者は本書の冒頭に、ルネサンス期イタリアの詩人アリオストの傑作『狂えるオルランド』（一五一六年）から「おお、邪にして、うとましき發明よ、いかにして汝は人の心に宿りしぞ」（協功譯を一部變更）という一節を掲げている。「邪にして、うとましき發明」が火器を指すことは云う

までもない。著者がある思いを込めて、火器を扱った本書の冒頭にこの一節を引用したことは明白である。才能に富む著者の第二作に期待するところ大なるものがある。

Cambridge, Cambridge University Press, 2003.
xvii + 290 pp.

丁文江・趙豐田編、島田虔次編譯

『梁啓超年譜長編』

岡 本 隆 司

年譜という傳記形式は、史書の編年體に對應する、すぐれて中國的なものである。個人の文章をあつめた別集には、編者が自他の參考用に添附收録する例が少なくないし、譜主みずから編む自訂年譜もある。もちろん後代あるいは現代に、新たに編集することも多い。いずれの場合にしても、多かれ少なかれ歴史上の人物の事績が、詳細にわかる履歷書として、便利な工具書、史料となりうる。年譜長編とは、ごく簡単にいえば、そうした年譜の記述がもとづく資

料を年次順に並べたものである。史料の原貌がそのまま残るため、年譜そのものよりも價值が高いとして、歴史家には尊重される。

その資料も譜主の經歷によつて千差萬別だが、公人なら普通は、公的に殘した文章を使う。梁啓超という人物は周知のように中國傳統學術の十分な素養のうえに、西洋の新しい學問の攝取につとめた學者、思想家であり、かつ二十代から政治活動家、ジャーナリスト、閣僚、教育家など、いまの職業的範疇では到底くりきれない廣汎な活動をして、ある意味で、中國の近代をつくった、とさえいえる巨人である。當然それが發表した文章も多方面にわたつて、膨大な量にのぼる。ところが『梁啓超年譜長編』は、通例の年譜編纂とは異なり、そうした文章を必ずしも中核の資料とはしない。梁啓超が家族、師友とやりとりした大量の私信を主たる材料につくつたものである。

梁啓超が歴史上はたした役割の大きさ、そしてその私信が久しく閲覽できなかった情況を考えれば、『梁啓超年譜長編』が二次史料、工具書にすぎない類書とは比較を

絶して、特別な地位をしめてきたのも、ただちに納得できるころだろう。梁啓超と周囲の人々の生活・意識・人間関係、そして活動の内的動機と實態をのぞかせてくれる、きわめて重要な文獻なのであって、ほぼ根本史料と同等の扱いをうけてきたといつてよい。

だからいやすくも中國近代史の研究者を名のる以上、座右に備えていて當然だろうし、筆者も氣儘に斜め讀みくらいしたことはあった。けれどもそれが、一千二百頁、八十一萬五千字におよぶ大部なものとしては、ざっと通讀するだけでも至難のわざであろう。つまみ食いのな一部の引用はありえても、すべて翻譯しようというのは、少なくとも筆者には、途方もない發想とは思えなかった。それがいま、まず日本でできあがりつつある。内容もさることながら、そんな事業が行われたということについて、若干の説明を要するであろう。

一九九三年四月、京都大學人文科學研究所東方部の共同研究として、「梁啓超の研究」班（狹間直樹班長）が発足すると、まもなくそれとは別に、島田虔次先生を中心

に有志が集まって、『梁啓超年譜長編』翻譯の研究會が組織された。島田先生はかねてより、年譜長編ものの翻譯をお考えであったらしく、中國思想史研究の大家であり、梁啓超の文章の翻譯紹介も手がけてこられた先生にふさわしい對象として、梁啓超をとりあげることに決したのである。折よく研究班の發足と重なって、會は狹間直樹・森時彦・井波陵一・江田憲治・村尾進・石川禎浩の諸氏という前記研究班の一部班員で構成され、筆者もその末席に連なつた。手順を打ち合わせたのち、五月から作業が始まることとなつた。

まず江田・石川兩氏と筆者、および井波氏と村尾氏が、年次で區切つた、まとまつた分量を分擔し、本文を下譯したうえ、注を施して提出する。ついで、狹間・森兩氏がその下譯原稿を校閲してから、島田先生と會讀して譯文を定めてゆく、という手續をとつた。梁啓超というすぐれて多面的な人物を相手にしては、一人の能力では多かれ少なかれ限界があるし、しかも『梁啓超年譜長編』の浩瀚さを考えれば、どうしても多人数の分擔作業とならざるをえない。開始して一年たつてからも、齋藤希史氏に

加入いただいたほどである。以上は分擔であるがゆえに生じかねない散漫や齟齬を未然に防ぐよう、萬全の配慮を期した手續といつてよいだろう。

だが時日が経過し、参加者の身分も移り変わり、大學をとりまく世情も厳しさをますますなか、このようなやり方をそのまま続けるのは困難となってくる。村尾氏と齋藤氏の参加はかなわなくなつたし、人文科學研究所助手として會のお世話を引き受けてこられた石川氏の轉出など、會の繼續そのものに影響を與える出來事が次々に起こつてゆく。それでも手續を簡素化したり、連絡を密にとりあつたりしながら、ペースに緩急はあつても、作業はなんとか繼續し、着實に進んでいた。

しかし時間というのは、やはり残酷である。すでにご高齢だった島田先生は、この苛酷な作業のためもあつて體調をくずされ、ついに二〇〇〇年、譯業の完成を見ることなく、逝去された。

それまでは下譯作業の段階で、いかにわからなくとも、まずい譯をしても、的はずれな注をつくつても、最後には島田先生がケリをつけ、正解をだしてくださる、とい

う奇妙な安心感、いな甘えが少なくとも筆者にはあった。そんな依頼心は、未解決のブランクを残した下譯原稿の堆積と化した。梅やんでも悔やみきれない痛恨事である。

しかもそれは、譯注の原稿をつくる前のことだった。注釋をどうつけるかは、いくつか案も出ていたものの、確乎とした方針は定まっておらず、譯文をしあげていく過程で島田先生にお考えをうかがって決めるつもりだった。先生を囲んだ會讀は百回を重ねたとはいえ、注釋作業がまだ本格化しないうちに先生が亡くなられたのは、この譯業にとって何よりの痛恨事なのである。そもそも本譯業には、狹間氏が迷懷しているとおり、島田先生「の學殖をできるかぎり文字にして留めたい」(島田虔次『中國思想史の研究』京都大學學術出版會、二〇〇二年、六六六頁)という目的があった。しかしそれはもはや、彼岸にしかない。

強いられ、本意に違うこととはいえ、ともかくこれが一つの轉機になった。會は先生の遺志を繼ぐべく發憤したといつてよい。それまでに蓄積された譯文を井波氏が整理統一して、ひととおり全體を見わたせるようになる、本格的に出版をみすえて、

狹間・井波兩氏を中心に、あらためて注釋をつくって、譯文を整える作業に走り出すことになった。以來四年、我々の氣力がなんと途切れずに持續しているのも、ひとえに對象となった『梁啓超年譜長編』のおもしろさ、島田先生ご逝去の悔しさ、それらにかきたてられてのことである。

『梁啓超年譜長編』は丁文江が梁啓超逝去の直後から編纂に着手したもので、一九三六年に『梁任公先生年譜長編初稿』という題で、私家版の油印本が五十部つくられた。久しく稀觀書に屬してきたが、いまは『北京圖書館藏珍本年譜叢刊』に收録されて、閱覽が容易になった。おびただしい貴重な資料を整理保存し、利用できるようにしてくれたことは、どれだけ評價しても過ぎることはあるまい。その事業のいきさつは、本書第一卷五十九頁の趙豐田「前言」にくわしいのでくりかえさない。ただほとんど空前の試みだったがために、「平敘體と綱目體を併用した」といいながら、そのまとも方は年次によってばらつきがあり、その後の版本も手を入れていないので、讀み手は注意を要する。

一九五八年、この油印本を活字化した刊本、全七八七頁が臺北の世界書局から出版され、一般に利用できるようになり、清末民國の政治思想史研究に欠かせない文獻としての位置を確乎たるものとした。だがもとの油印本にあった、固有名詞に對する傍線が省かれてしまったり、コンバクトになった分、文字が小さく字間も狭く、改段が少ないなど、あまり使いやすいテキストとはなっていない。

本書が底本とした一九八三年刊行の上海人民出版社版は、油印本の編纂にあたった趙豐田が完成させ、『梁啓超年譜長編』と改題したものである。散在する誤字を正し、隨處に史料を増補し、脚注を加えている。世界書局本と比較すると、固有名詞の傍線がないのは共通するが、簡體字・横組み、字間が空いて多くの改段を施してある。頁數は増えたがその分、史料的价值は以前の版本より高くなると同時に、見やすく使いやすいものとなった。けだしまず據るべきテキストではあろう。だがそんな長所を相殺するほどの誤植、句讀の誤りが見られるし、脚注は參考にはなるが、あまりに簡略で位置も無原則、なくもがなのものも少な

くない。同じ文面のはずの史料でさえ、世界書局本と出入があつて、しかもそれには何のことわりもない。やはり決定版とはいえないのである。我々も大いに参照した吳天任『民國梁任公先生啓超年譜』臺灣商務印書館、一九八八年が、基本的に世界書局本に依據しているのも、故なしとしない。

けつきよく『梁啓超年譜長編』を使うには、底本のほか最低限、世界書局本はそなえていなくてはならない。時の政治情況が人物の評価、書物の記述に翳を落とす中國のことであつてみれば、それは當然だし、まして翻譯となれば、あらゆる版本を校合して、譯出すべき對象を正確に定める必要があるのは、この場合にかぎつた話ではない。作業はまずこの第一歩から、難澁をきわめた。テキスト校訂の不備で理解できなかったり、誤りを犯したことも一再ならずあつたし、氣づかぬまま足をすくわれているかもしれない。

それだけでなく、書簡文というのはわかりにくい。直接に物事を指しあらわすのをきらう中國文ならなおのこと、ましてやその壯年期を政治犯として亡命生活を過ごし、文字どおり世界中をとびまわり、地下工作

にも従事した梁啓超であつてみれば、本名表記でもよくわからない固有名詞はもとより、隱語や暗號が頻出する。せつかくの脚注もお手上げとみえて、ほしいところに注のないことが多いのである。そもそも部外者にわからないように書いてあるのだから、部外者の最たる我々が、うかがい知るのは容易なことではない。しかし外國語に譯出する以上、それがわからなければ、正確な翻譯には到達できない。

幸いなことに、この作業をはじめてから、『梁啓超年譜長編』が資料とした書簡原物の一部が、たとえば『梁啓超未刊書信手札』國立中央圖書館特藏組編、一九九五年の寫真版でみることができるようになり、テキストの確定がずいぶん楽になった。關連の研究も續々と公刊され、また情報技術の發達で檢索調査がはかどり、事情がよくわかるようになった部分もある。作業がすすむなか、次々に譯注をつけ足していかねばならず、それにともなつて、譯文じたいも修正を迫られたのは、うれしい悲鳴であつた。それでも疑問百出、頭をかかえたことは少なくない。

そのため島田先生も、來日中の中共中央文獻室副主任・復旦大學教授の金冲及先生に直接、示教を請われたし、この四年の間にも、中國社會科學院近代史研究所の楊天石先生、中山大學の桑兵先生をお迎えし、警咳に接してのご教示をおおいだ。外國人では到底もちあわせない知識、思いもよらない着想と明察は、つくづく勉強になったというほかない。さらに國內外のさまざまな方から、ご協力をいただいたことも数知れない。記して感謝したい。そして何より、出版が實現するにあたっては、財團法人リソニア・アジア・オセアニア財團の國際交流活動助成、ならびに財團法人日中友好會館の日中平和友好交流計畫歴史研究支援事業助成をえた。この助成なかりせば、現在のようないかなる形の刊行はできなかったであろう。關係各位のご配慮に一同、心から深謝申し上げる次第である。どうか最後まで到達できそうなどころまで來たものの、まだ仕事は終わっていない。ひきつづきのご支援をお願いするものである。

本書は底本の膨大さを反映して、一冊平均五百頁、全五卷となる豫定である。既刊

分は三巻、一九一四年までカヴァーしている。第一巻は一八九九年まで、クライマックスはやはり、戊戌變法と日本亡命。若き梁啓超が、師の康有爲とともに中國の變革にとりくみながら、人間形成をはたしてゆく時代である。第二巻は、一九〇〇年の勤王運動を皮切りに一九〇七年まで、地下工作を含めた亡命中の政治活動、報道活動が出色。公人としては政治犯ながら、かれの令名を決定づけた重要な時期にあたる。第三巻は辛亥革命をはさんだ六年間、かれの歸國前後、清朝滅亡・民國成立期の激動する政情がモティーフとなる。かれの經歷においても、一つの轉機をなしている。續刊の第四巻は、護國戰爭を組織し、袁世凱の帝制運動をはばんで、政治の表舞臺に立ち、にもかかわらず志かなわなかった政治家の苦惱を描く。第五巻は早すぎる晩年、若年時に喧傳した西學から國學に回歸し、病魔と闘いながら、教育・學術に打ち込み、子女の育成に心を配る姿が印象的である。

書物に何か定まった読み方、使い方があ
るわけではない。年譜長編という體裁の本
書ならなおさらで、讀者の關心に應じて、
さまざまな利用のしかたがありうる。主人

公梁啓超の五十六年の生涯をつづった評傳
として讀むのが、もつともオーソドックス
なところだが、微細な史實・史料を發掘す
る手がかりにもなろう。どんな使い方で
も手にとつて賞翫し、中國近代史に思いを馳
せていただければ、そして新しい研究の礎
石となつてゆけば、翻譯・注釋に携わつた
者としては、それで本望である。ただ作業
に従事した側として、以下の點に留意して
ほしい。

まず以前からわからないとされていた登
場人物をかなりの程度、明らかにしたこと
である。譯注・別稱表・人名索引を組み合
わせれば、中國近代史の一種の人名辭典・
別號索引としても、大いに利用できるはず
である。これはひとえに、石川氏の後任助
手として、一九九八年から作業に参加され
た高嶋航氏の獻身的な努力による。

第二に、譯注がいささか詳細にわたつて
いることである。こうしたばあい、注釋は
できるだけ簡略にすませるのも、一つの見
識ではある。だが特殊なテーマに屬する本
書は、やはり大部数の出版は望むべくもな
い。それなら、歴史の研究を志す學部生、
大學院生あたりを念頭に置いて、なるべく

精密な注釋をつけたほうがよい、島田先生
が精魂を傾けられた『三十三年の夢』の注
釋（『宮崎滔天全集』第五卷、平凡社、一
九七六年。のち岩波文庫に修訂版、一九九
三年）をモデルとし、あわせて先生の著述
をできるだけ活用する、との方針に決した。

その譯注は譯文と同じく、擔當者がひと
まず起草した文案を、多人數で検討議論し
てできあがつている。文章の添削はもとよ
り、參考文獻を補つたり、必要ならまつた
く別個の文章にさしかえたこともしばしば
である。インターネットや電子メールはい
まや學術でも不可欠なツールになりつつあ
り、この作業においても、三年前に導入し
たメーリングリストが絶大な威力を發揮し
た。一堂に會しての作業も、週一回のペー
スで續いているが、それとは別に電子メー
ルでの議論が加わつて、多い月のはべ二百
回におよぶやりとりがある。

注釋は不要なら、とばして讀んでいただ
いて全くさしつかえない。關心を持たれた
なら、任意のトピックに對する譯注から、
ひととおりの知識や裏面の事情、標準的な
研究成果を入手できるようにしたつもりで
ある。それでも不明、不備なところは多々

あるし、譯注という形式上、敘述に意をつくすことができなかった箇所も少なくない。譯注の作成にあたって参照した文献を、不十分ながらあげるようつとめたのは、研究手引きの機能をもたせるほか、遺漏・錯誤の批正をいただきたい、というねらいがあつてのことである。面倒な文献目録の整理は、高嶋氏轉出のあと、助手に着任された村上衛氏の手になる。

本書既刊分には編集の手違いから、以上のような翻譯・注釋に携わった我々の名前が掲出されなかった。いくつかいただいた問い合わせにこたえ、そして責任の所在をなるべく早く明示する必要から、この場をお借りして、一覽を掲げておきたい。

狭間直樹（京都大學名譽教授・京都產業大學外國語學部教授）

井波陵一（京都大學人文科學研究所教授）

森時彦（京都大學人文科學研究所所長）

江田憲治（京都大學總合人間學部教授）

石川禎浩（京都大學人文科學研究所助教）

岡本隆司（京都府立大學文學部助教）

高嶋航（京都大學學院文學研究科助教）

村上衛（京都大學人文科學研究所助手）

早川敦（京都大學學院文學研究科博士後期課程）

新刊紹介といいながら、本をつくる内幕ばなしばかり、場違いな文のまま紙幅がつきるのは、恐縮の極みである。ただ公にあらわれた文章を紹介するなら、客觀的な眼によるほうが公正だろうし、評價も議論も建設的になろう。すでにいくつか公私にわたり、ご高批をいただいてもいる。それからここはむしろ、『梁啓超年譜長編』よろしく、當事者でないといえないうきさつを記すにしかず、と判斷した。梁啓超の公的活動が私的な生活に支えられていたように、以上の營みなくして、『梁啓超年譜長編』の翻譯も注釋も存在しえなかったから

である。いかに手續に萬全、記述に正確を期したつもりでも、過誤はまぬかれない。

讀者の方々には今後、作業方法もふくめて、ぜひ忌憚なきご指摘をいただきたいと思う。こちらで氣づいたこともあわせ、誤脱の補訂は、最終巻でまとめて行ふ豫定である。

十年ひと昔とはよくいったもので、過ぎ去りし時間に對する感慨と愛惜を、激發する世相に對する無力と歎息を、集約していいあらわしてくれる。刷り上がった本書第一巻を手にしたとき、眞つ先に浮かんたフリーズがこれだから、歳だけはとつたものだと思う。と書いている目の前には、山と積まれた原稿とグラが、推敲と校正をまちかねている。續刊のメ切が、刻々と迫ってくる。現實にもどれば、とにかく全五巻が滞りなく完結せんことを願つて、作業をつづけるほかない。感傷にひたれるのは、どうやらもう少し先のことのものである。

既刊第一卷 二〇〇四年二月 第二卷

二〇〇四年三月 第三卷 二〇〇四年五月
東京、岩波書店 八四二六五八・四七七・

五三二頁